

「総合的な学習の時間」の指導法に関する諸課題の考察

-学校現場における実践資料をとおして-

Consideration of several problems about a method of teaching of

“the period for integrated studies” -Through practice material in school-,

渡辺 雅之・猪俣 修・竹澤 清美

lead author Masayuki Watanabe, co-author Osamu Inomata, and Kiyomi Takezawa

Key words: 総合的な学習、コアカリキュラム、教職課程

はじめに

文科省は、「教職課程コアカリキュラム作成の背景と考え方」において「国民は、公教育の担い手である教員に対して、その職への適性と高い資質能力を期待している。それに応えるためには、教員の養成・採用・研修の各段階をつうじた普段の改善努力が求められるが、その中でも教員資格の付与にあたる教職課程のあり方は、最も重要視されなければならない」と掲げている¹。

そして、「わが国の教員養成においては、将来、知識基盤社会を生きることになる幼児・児童・生徒の教育に、幅広い視野と高度の専門的知識・技能を兼ね備えた高度専門職である教員が当たることを目的として、教員養成の基幹部分をなしている教職課程は原則として大学における教育研究の一環として学芸の成果を基盤に営まれることになっている。同時に、教員は教職に就いたその日から、学校と言う公的組織の一員として実践的任務にあたることとなるため、教職課程には実践性が求められている。このため教職課程は、学芸と実践性の両面を兼ね備えていることが必要とされ、教員養成は常にこの2つの側面を融合することで高い水準の教員を養成することが求められてきた」と述べ、大学における教員養成課程において、理論研究と実践的指導法の両方をブラッシュアップすることを求めている。そのために、その指針または基盤となるコアカリキュラムを提示している。本稿

においては「総合的な学習の時間(以下、「総合」と記載)」が、現場でどのように実践され、そこにどのような課題が生じているか。またそれらが「総合的な学習の時間の指導法-コアカリキュラム」とどのような連関があるか考察し、教員養成課程に関する授業の効果的な運営についても検討する。なお、おもな実践事例として埼玉県公立中学教師を39年間務めた猪俣修の指導計画と実践資料を用いる。

1. コアカリキュラム全体目標

総合は2002年(小中学校)、2003年(高校)の全面実施以来、様々な批判的検討を含みながら現場実践がなされてきた。すでに菊地(1999)は導入の動きに対し、「そもそも、教科の指導が、『総合』的な視点を備えながら実践されるという事は、決して特別なことではありません。というより、子どもの関心や問題意識や要求に沿って行われる教科学習の多くは、ほとんどが『総合』的な視点を含んでいるとも言えるのかもしれませんが」と述べ、教科学習の見直しを含めて、総合の時間をどうするかについていくつかの課題を提起している。

それは、人権教育、環境教育、平和教育、性と生の教育、労働と職業の教育、進路教育の充実であり、とりわけ進路教育については、「進路観の基礎となる社会科学

的・自然科学的認識は、教科の学習を通じて深めるのが原則であるが、先に提起した進路指導を構成するいくつかの柱について、必ずしも現在の教科指導の枠内に収めることにこだわらず、特別な教材、指導課程を作っ、知的認識を深め、または生徒の自主的活動を展開させることもあって良いだろう」と述べ、横断的で総合的な教育課程編成の必要性についても言及している。コアカリキュラムにおいては、総合の全体目標は以下のように明示されている。

総合的な学習の時間は、探求的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す。各教科等で育まれる見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するために、指導計画の作成及び具体的な指導の仕方、並びに学習活動の評価に関する知識・技能を身に付ける。

菊地の提示した課題に加えて「探究な見方・考え方」という概念が提起されていることに注意を払いたい。はたして「探究な見方・考え方」は現場ではどのように実践されているのだろうか。猪俣は「2年ふれる-職場体験の計画と実施」において、目標を次の三つにしばって指導を展開している。

- ①今年度の総合学習の概要を知る。
- ②職場体験の事前学習を通して、職場体験のリストの中から三日間の自分の職場体験の希望をだすことができる。
- ③職場体験の事前学習をしっかり行い、目的意識を持って積極的に参加し、自らの課題をみつけだそうとする。

とくに、この③は「探究な見方・考え方」を深めるものであり、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現するための目標設定ということが出来るだろう。さらに全体目標との関連で猪俣がどのような指導を行ってきたか検討しよう。

2. 総合的な学習の指導計画の作成-総合学習のねらい(ガイダンス)

猪俣は中学1年に向けて次のような資料を配布し、ガイダンスを行なっている。

☆「総合」の時間とは何ですか？

正式には、「総合的な学習の時間」といいます。三ヶ島中学校では、一昨年度から実施しています。今年は、一年間に70時間分実施します。

授業としては、自分で興味をもったこと、調べてみたいことをまず決めてもらいます。これを課題といいます。課題を決めるまでに、私たちの三ヶ島地区周辺にはどんな課題があるのかを見たり、ふれたりします。また、調べ方やまとめ方を教えてもらいます。

そして、課題を決めたら、いろいろな方法で調べたり、実験したりして解決していきます。そして、解決したことをまとめて発表までしてもらいます。

ここでは、年間70時間を使うことを提示し、子どもたちの学ぶ意欲を喚起しようとしていることがわかる。しかし、入学したての1年生にとって、これだけでは漠然としており、イメージがつかみにくいため次のように全体テーマを具体的に提示している。菊地は先に「特別な教材、指導課程を作っ、知的認識を深め、または生徒の自主的活動を展開させることもあって良いだろう」と述べ、子どもたちの自主的活動を一つのゴールにしているように見えるが、自主的活動と放任はまるで異なる。子どもたちの中にある学びの要求や生活の中から生まれる疑問は、基本的に眠っているものである。教師はそれを丁寧に聞き取り、掘り起こしながら自主的活動が伸長するように指導していく必要がある。よって猪俣、「ふるさと-三ヶ島をにのうもの」という極めてイメージの湧きやすいテーマを提示しているのである。

☆「総合」の「全体テーマ」のこと

私たちは、三ヶ島の「まち」で生活しています。(林小学校校区も市内全体から見ると三ヶ島地区と呼びます) わが三ヶ島を大切にしていましょ。課題は、基本的には何でもいいのです。しかし、せつかく三ヶ島地区に住むわたしたちです。自分たちの「ふるさと」三ヶ島に何らかの関わりのあることを選んでもらいたいなと思います。また、いざ調べ始めると私たちの生活する三ヶ島地区から、離れてしまうと苦勞することが多くなります。例えば、「コアラの生活の観察」を課題とします。動物園で観察するには上野動物園へ行くのですか。これは難しいですね。本から調べるこ

とができますが・・・。「大リーグの野球」を課題として・・・。アメリカ合衆国に行けません、もしかして、三ヶ島地区に大リーグに詳しい人がいれば、調べられそうです。

何かの形で、三ヶ島地区と結びついてほしいのです。

ということで、全体テーマとして、「ふるさとー三ヶ島をにのうもの」があります。「にのうもの」とは、担(にな)う者という意味です。三ヶ島をささえていく人、中心となる人という意味もあります。

総合の目標(ねらい)と学習の進め方がわかりやすく提示されており、さらに、年間の見通しを次のように具体的に提示する。

☆「総合」はどんなふうに進んでいくの？

ふれる 総合とは何かを知る。三ヶ島にどんな課題があるかを知る。調べる方法を学ぶ。三ヶ島の職場を体験して、三ヶ島を人を通して深く知る。

つかむ 自分の課題を決める。調べる計画をたてる。

活動する いろいろな方法で、調べたり・実験したり・観察したりする。

まとめる 調べたことを、発表に向かってまとめていく。

発信する 発表する。どうやって自分の調べたことを人に伝えたらよいか考えよう。

☆「総合」で1年生でやることは？

5/22(金) 5.6時間目 全体ガイダンス…… 何をしたらよいのか説明します。

6/12(木)・/30(月)・7/1(火) 3日間全時間…… 「ふれる」の時間

○調べる方法、発表方法を教えます

- ・デジカメの使い方
- ・シナリオづくりの方法(まとめ方)
- ・OHPの使い方
- ・新聞の作り方(発表方法)

- ・コンピュータの使い方(インターネットなど)
- ・活動計画作り

以上は学校の中(各教室)で学びます。

○野外調査をします・調査のまとめ・発表

実際に学校の外に出て、「わが三ヶ島に何があるのか」を知ってもらいます(午前中)。また、行った後で調査

したことをまとめてもらいます(午後1時間)。

以上は、学校外へ出ます。事故がないよう気をつけることをあらかじめ教えます。

10/3(木) 職場見学の準備・グループ決め

どうだろうか、具体的な指導の様子がよく分かる。とくに大切なことは、方法論だけではなく、「なぜ学ぶのか」が基盤にあり、そのためのものとして「方法」が提示されている点である。

総合的な学習の時間の指導計画の作成のコアカリキュラムでは、一般目標として「総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身に付ける」とされている。また到達目標として「(1)各教科等との関連性を図りながら総合的な学習の時間の年間指導計画を作成することの重要性と、その具体的な事例を理解している。(2)主体的で・対話的で深い学びを実現するような、総合的な学習の時間の単元計画を作成することの重要性とその具体的な事例を理解している」と提起されているが、教職課程の授業においては、このような現場で実際に使われた資料を批判検討することにより、これらの目標に迫ることが出来るだろう。現場実践の具体的なイメージは説得力をもって、学生の学びの深化をもたらすはずである。

3. 総合的な学習の時間の指導と評価

コアカリキュラムでは一般目標として「総合的な学習の時間の指導と評価の考え方及び実践上の留意点を理解する」と示されている。また到達目標として「(1)探求的な学習の過程及びそれを実現するための具体的な手立てを理解している(2)総合的な学習の時間における児童及び生徒の学習状況に関する評価の方法及びその留意点を理解している」とある。現場実践において最も重要なのは、子どもの発達段階と生活経験をふまえて、「何をどうすれば、学びが深まるのか」を具体的に示すことである。それが、「(1)探求的な学習の過程及びそれを実現するための具体的な手立ての理解」である。猪俣は、「パソコン実習」「新聞づくり」「図書館の活用」「レポートの書き方(電子機器の使い方)」など、極めて具体的に子どもたちに具体的手立てを提起している(以下資料の抜粋)。

1 分類 1年ふれる (パソコン実習) 学習指導計画

2 目標 ①パソコンの使用方法をルール理解させる。

②総合的な学習の時間で効果的に使えるよう

にする力をつける。

展開例（2時間扱い）

指導内容	指導上の留意点
<p>コンピュータでできることを学習し、自分でできることの幅を広げるようにしていく。</p> <p>プレゼンテーションソフトを使う上での基本的な操作方法を学習する。</p> <p>基本パターンを作り、プレゼンテーションの効果を実感し、自分の発表方法の一つとして考えられるようにしていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・文章を書く。インターネットで情報を集める等の内容には簡単な説明だけとし、その内容については別の時間や教科等での指導の中で学習していくようにする。 ・手順についてはプリントに従ってやっていくようにする。 ・わからないことは聞くようにしていく。 ・プログラムから「Microsoft Power Point」を選ぶ。 ・「新しいプレゼンテーション」を選び、とりあえず右下の白紙を選ばせる。 ・「挿入」で図やテキストボックスで絵や文字を入れていくようにする。 ・「スライドショー」を選び・「アニメーションの設定」を選択する。 ・「効果なし」の右にある▼を押し、効果の方法を選択する。 ・文字や絵についても同じように効果をつけることができる。「プレビュー」で効果を見ることができるので、いろいろな方法を試してみるようにする。 ・「挿入」 ・左下の「スライドショー」のボタンを押して画面を動かしてみる。 ・「挿入」から「新しいスライド」を選び、次のページを同じように作る。 ・最後に何人かで発表しあって、自分のと違う表現方法も学習していく。
<p>必要な教材</p>	<p>個人用CDRメディア</p> <p>プリント「プレゼンテーションソフトを使ってみよう」</p>

教職課程の授業においては、このような資料を参考に、学生たちが自ら指導計画や具体的なプランを作成し、それを集团的に検討することが望ましい。今であれば、SNSの利用法と注意点、ICT活用の方法などを小中高の発達段階別に検討すれば、様々な実践的課題が浮かび上がると同時に、なにをどのように評価すればいいのかという

視点も明らかになってくるだろう。

また非常に重要になってくるのは、教師集団によるカリキュラムの見直しと再編である。それを抜きに指導と評価の適正化は計れないからである。猪俣実践は、以下に示すように学年会で原案を提起し教職員による集团的検討と学習の共同化を計っている。

第一学年の検討項目

今年度の確認事項<今後の課題及び検討事項>

- さらに、完全自由ではなく条件を設定していく必要がある。徒歩40分以内。安全であること。アポイントをとるなど。
- 課題決定までの教師の関わり方（支援方法）
 - 何を調べたいで終わりではなく、そこからどのように幅広く別な課題へつなげられるか。また、課題があり本で調べて終わりの総合学習でよいのか。非常に重要なポイントとなる時間である。
 - これをどう進めていくかが、グループ研修だけでは不十分ではないか。全職員の創意工夫を求めていい時間帯と考える。

今年度の事前活動確認項目

- 事前準備について、役割分担をします。

<必要書類の準備> ①コース決定計画書

②職場・見学場所一覧表（年度姫に再度確認・活動時期に再度確認）

③コース決定条件（フィールドコース・職場コース等）

④マナー説明書

⑤当日もつ統一メモ用紙（事業所の仕事内容、質問事項、メモ、感想等）

⑥活動計画書

⑦教員の配当表の作成

⑧インタビュー用紙の改善（会社の志度と内容や特徴・質問事項・感じたこと・調べる方法のまとめ・感想）

⑨インタビュー名簿の作成者とアポイント名簿の作成

【確認項目】

- ねらい、目標の内容の検討

- 指導計画の中で課題発見の支援方法について。

・個人バラバラで、帰校し、生徒が教室に残ることの支援教員の配置について。

- 課題を解決する指導支援について具体的な共通支援マニュアルの確認。

課題を明確にしていく支援の方法など

- 今年の実態にあった、アポイント取り 該当の職場に連絡し、訪問人数と予定時間を連絡、調整、依頼をする。学者連携担当

- 感性を磨く方策の検討

学習課題を見つける支援方法

- 評価の方法の検討 資料を参考にし、検討する。

- この資料を基に、毎年実態にあった、資料の再検討はかならず必要。

総合的な学習は、時にフィールドワークなど学校外での活動を要請する場合がある。そのため児童・生徒の参加にあたっては安全に関する十分な配慮が必要である。

そのためにも上記資料にあるように、具体的場面を想定しつつ、教師集団の合意形成と共通理解が欠かせないものであることに注意を払いたい。

4. 総合的な学習の時間の指導計画の作成

コアカリキュラムでは指導計画作成の一般目標を「総合的な学習の時間の指導計画作成の考え方を理解し、その実現のために必要な基礎的な能力を身に付ける」としている。到達目標は「(1)各教科等との関連性を図りながら総合的な学習の時間の年間指導計画を作成することの重要性と、その具体的な事例を理解している。(2)主体的・対話的で深い学びを実現するような、総合的な学習の時間の単元計画を作成することの重要性とその具体的な事例を理解している」とされ、より具体的で実践的な指導計画作成の能力を養うことを要請している。

今まで考察してきたように、それらの力を養うには、何よりも現場実践から学ぶことである。そこには、子どもの感想や声の聞き取りが欠かせない。たとえば「主催：総合的な学習の創造的な展開を推進する会」が開催した総合的な学習を推進する緊急シンポジウムでは次のような子どもたちの声が紹介されている¹¹⁾。

○「それまでは人前で話すことが苦手だったが、中学校で自分のまちについて3年間調べたときに、地域の人たちの手助けを借りるためには自分の思いを伝えなければならぬと感じ、自分が変わった。」(田栗千愛さん:佐賀県立武雄高等学校3年生)

○「環境学習で高い目標を掲げ、空き缶をたくさん集め、車イスを福祉施設にプレゼントできた。最後まであきらめが頑張った力が、今も私についている。中学生になって、テスト勉強とか本当につらくても、あきらめずに最後まで頑張れるようになった。」(築取明日香さん:横浜市立老松中学校1年生)

○「福祉や環境学習を通じて、世の中という周りを見る目が変わった。福祉学習では、これまで意識していなかった点字ブロックを、よけて通るようになった。環境学習では、割り箸や折り紙などの使い捨てに木の無駄遣いに気づき、もっと資源を大切にしなければと思った。」(横山一晃さん:新宿区立四谷第三小学校6年生)

しかしながら、もっともよい資料は学生自身の原体験を共有することである。上記にあげたような一見肯定的な感想や声を拾うだけでは意味がない。自身の「総合」の学びの体験を語り合い、内包するポジティブなもの、ネガティブなもの・・・そこに共通するものを課題として洗い出すことが「子どもの感想や声からの聞き取り」に他ならない。そこには「人権や平和について深く学ぶ

ことができた」「何をやったか分からなかった」「結局、空き缶集めやプルトップ集めてなんだったのか?」「先生からのやらされ感しかなかった」などの生の声があることが予想される。「(2)主体的・対話的で深い学びを実現するような、総合的な学習の時間」とは、そうした具体的な実践の検討なしで計画されるならば、それは子どもたちの実態や実感、とかけ離れた机上の空論になってしまうだろう。

5. 総合的な学習の時間の意義と原理

一般目標には「総合的な学習の時間の意義や、各学校において目標及び内容を定める際の考え方を理解する」とある。到達目標は「(1)総合的な学習の時間の意義と教育課程において果たす役割について、教科を超えて必要となる資質・能力の育成の視点から理解している。(2)学習指導要領における総合的な学習の時間の目標並びに各学校において目標及び内容を定める際の考え方や留意点を理解している」とある。菊地(前掲)の主張を借りれば「人権教育、環境教育、平和教育、性と生の教育、労働と職業の教育、進路教育の充実」であり、教科横断という視点であれば「特別の教科 道徳」との関連も注意したいところである。

道徳教育は他者への共感性を基盤としながら「教室と世界はつながっていることを知り自分たちの手で社会世界を変えることができる」という実感と見通しを持つための教育活動であり、シチズンシップ教育であり、地球市民のための教育そのものである。言い換えれば、それは平和教育であり、人権教育であり、多文化共生教育であり、持続可能な開発のための教育-ESDであり、主権者教育であり、そうした意味で社会に働きかける政治教育としての性格を強く持つものである(渡辺, 2019)。総合が「各教科で育まれる見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究する学びを実現する(コアカリキュラム全体目標)」ためには、道徳科実践との連動も大いに期待できるところだ。例えば、道徳科の年間計画を概観しながら、総合の年間計画とどうリンクできるかなどの追求は「教職課程は、学芸と実践性の両面を兼ね備えていることが必要とされ、教員養成は常にこの2つの側面を融合することで高い水準の教員を養成することが求められてきた(コアカリキュラム作成の背景と考え方)」と合致する学びとなるはずである。

おわりに

「総合的な学習」の実践とその傾向について考察してきたが、現場レベルでは次の三つが大きな課題として挙げられる。一つ目は指導時間の確保である。これは児童・生徒の授業時間を確保すること以外に、担当者の原案作成や学年会における検討、フィールドワークの際の学習現場との連絡調整など、指導に膨大な時間がかかるという問題である。勢い、担当者の負担は大きくオーバーワークに陥ることも少なくない。

二つ目は小中の連携の難しさである。学区を起点とした公立学校の場合は、すでに小学校で学習した内容が中学校で提起される場合もあり、「せんせい、それすでに小学校でやりました」という声を聞くこともある。また、せっかく小学校で蓄積した学びの成果が中学校では活かされていないケースも散見する。緊密な連携が求められる分野でもあるにもかかわらず、実際に小中の連携についての意識が弱い現実があるⁱⁱⁱ。

そして、三つ目は指導する教師（とくに担当者と学年教師団）の意識によって学習成果に大きな差が生じるという問題である。意欲と見通しをもって「総合的な学習の時間」に臨む教師と、消化試合的な気持ちの教師が混在するのが現場の実情である。しかし、これは教師個人や教師集団の意欲の差と単純に論じることはできない。学校現場にはいま、かつてないほど様々な課題が存在する。例えば、2019年から完全実施された「特別の教科 道徳」、小学校の英語学習、ICT 教育をはじめとして、全国一斉学力テストも依然として現場にプレッシャーを与え、大きな負担となっている。また、いじめや不登校も高止まり傾向で、発達に困難を抱える子どもたちも増えている。このような中で多忙化が進行し、「総合」に十分な時間がかけられない現場教師たちが大半である。

とするならば、「総合」を一般教科と紐づけて教科横断的性格の実質を確保することや、思い切った内容の精選を行い、児童・生徒が主体になって学ぶ活動に限定するような学びに限定するなど、カリキュラムそのものの検討も必要になってくるだろう^{iv}。

「特別活動」や「総合的な学習」はいずれも生徒の主体性や経験的取り組みを基盤に行われる教育活動として、これまで日本の学校教育に独自の特徴を作り出してきた。そしてこの両者は、現代社会においてさらにその重要性を増してきている(今泉・関川, 2019)。

現代社会にある課題を、児童・生徒たちの生活のリアルと結びつけるような形式的ではない、活きた「総合的な学習の時間」を構築するためには、教育観の根底に関わ

るような思い切ったカリキュラムの再編成も必要になってくるだろう。

参考文献

今泉博、岩辺泰吏、菊地良輔、『「総合的な学習」の時間をどう創るか』, 民衆社, 1998年, p88-90
 渡辺雅之、『「道徳教育」のベクトルを変える-その理論と指導法-』, 高文研, 2019, p234
 関川悦雄・今泉朝雄、『特別活動・総合的な学習の理論と指導法』, 弘文堂, 2019, IIIはじめに

i [https://www.mext.go.jp/content/1421964_2_1_2.pdf\(2020.7.12](https://www.mext.go.jp/content/1421964_2_1_2.pdf(2020.7.12) アクセス)

ii [https://www.sawayakazaidan.or.jp/jigyoushokai/chukyoshin_report.pdf\(2020.7.12](https://www.sawayakazaidan.or.jp/jigyoushokai/chukyoshin_report.pdf(2020.7.12) アクセス)

iii この傾向は中高の連携でも同様だが、現時点では中高の連携はまた別の課題を抱えていると言えるだろう。

iv その場合は、研究発表でよくみられる「見栄えのいい見てくれ」を求めることなく「子どもたちが何を学び、何を獲得したか」という見取りが必要になってくる。